・五月の同行：イコ
　まず感じたのは、背景の描写などの表現が遠回り過ぎるかな、ということ。比喩を重ねるあまりに分かり難い部分が多々生じているように思います。
　内容は「イオンに買い物に行った」という日記になってしまっている。特徴的な「同行者」をもっと掘り下げるとか、ドライブの話にするのか、最後の夕日に、それを眺める姿に刹那的だったり情緒的なものを付加するとか、そのようなものが欲しかったかな、と思います。

・リセット：しろくま
　最初に「リセット」が入るセリフはぎゅっと惹き付けられるものがあって、その導入部分が良い。
　しかしネタばらし早いw
　何故、何がリセットされたのか。リセットする、される事の効果、作用と、その結果、あるいは副作用などあれば良かった（例えばひとちゃんを思い出せないとか、街の人の様子は最小限にしてまゆちゃんともっと語って話が噛み合わないとか）
　何かしらひねったオチを期待しただけに物足りなさが残りました。

・明け方の焔：崎本 智（６）
　全体的に流れる雰囲気というか、空気感がすごく好きでした。
　冬の風景に演出された導入部分は緊張感があっていいのだけれど、そこから現状をつかむまでが分かり難くなっている。
　叔母と猟師は何故書く必要があったのか？それが妻との関係の話に収斂されていくなら納得できるなあ、と思います。

・いざ起て戦人よ：小野寺 那仁
　後半部分で特にちょいちょいと笑いのセンスを感じて、最後の合唱シーンに至る過程は、映画「オーケストラ！」のぶっつけぶりと

被って楽しめました。
　主人公の日常に対する「軽さ」がすごくいい感じに表れている。ささやかな悩みとそれを受け流す毎日の描写が心地よくミックスされていて爽やかな読後感がある。
　個人的には良いラノベが書けそうかもと思ったのと、しのぶ告白シーンのぶった切り方が凄くて吹いた。
　あえて言えば、暴力沙汰もやぶさかでない主人公が読書家になる過程がいまひとつすんなりと入ってこない。

・目覚め：緑川
　語り手が観察者として眺めている風景が自然と事故の内面世界に流れ込んでくる最後の一文が、技あり！って感じですね。
　一人称のはずの視点を二人称で語っているところで、作品と著者の距離感が上手くとれてるのかなあ（などと偉そうに分析）。
　ただ、霊感ありますの的な話は序盤から小出しに出来たらその方がバランスよかったかも。

・劣情に惑う剣：常磐 誠
　突っ込みどころ多数ながら、素直に突き進んで読んでいける、好感もてる作品でした。
　読みやすさがあって、それは多分、書きたい内容が最初からはっきり決まっていたんだろうなあ、と。
　甘ったるいくらいの若々しい精神も好感を持てる範囲。でもこれ以上内面語ると多分ウザくなる。
　初めの香織の描写と、乱取りで負けまくるシーンをフラッシュバック的に混合できれば、一章目としては完璧だったと思う（あくまで個人的見解）
　このケンカシーンで絞め技はありか？
　盲目でも普通の学校なのか。。。
　主役の名字出すなら一行目でやっとくべき。

　など

・オレンジの巣：あんな
　独特の書式に「なんじゃこりゃ」と最初は面食らうものの、慣れてくるとこの書き方になるほど、と思えてくるものがあった。しかし何がなるほどなのかと聞かれると上手く説明できない。
　だがこれだけ詩的なセンテンスを綴り続けながら、しかもストーリーの全体像もよくわからないままに、何故かぐっと顔を近づけて読む感じになるのは、一文一文が物凄く丁寧に言葉を洗練させていっているからではなかろうか。
　小説というよりは詩として成立していると思う。

・親子の敗走：だいぽむ
　トロを見送ったあたりで思わず吹いた。ファミレスで一人、恥ずかしい思いだった。
　なんつーか言う事が無い。ただただ面白い。
　鮨屋と帰りの車内の落差がいい。

・出来そこないのマリア：る
　えらくハードボイルドな趣味の高校生で、何故大人の話にしなかったのだろうと、それが疑問。幼さがまったく無くて、それが違和感として残る。
　世界観がアメリカ過ぎるかな、と思いつつも純和風でいくと演歌になりそうで、何かバランスのとれる要素が欲しい。その意味では「限りなく透明に近いブルー」を思い出した。
　毒の強い描写ながら読みやすさがあるのは、やはり書きたいことがしっかり定まっているのかなあ、と予想しつつ読ませていただきました。